

いつも当社システムをご利用いただきありがとうございます。
今月分の請求書をご査収の程よろしくお願ひ申し上げます。

いつも大変お世話になりありがとうございます。
満開の桜はあっという間に花びらを落とし、葉桜になりつつあります。すっかり暖かくなった大阪です。皆さまはいかがお過ごしでいらっしゃいますか。

2024年、美術への興味が高まっております。前回ご紹介した大塚国際美術館で、物足りなかった画家のひとりが「モネ」。野外展示の「モネの庭」なども力作ではあったのですが、個人的には「コレジャナイ感」がありました。
そんなフラストレーションを払拭すべく、大阪中之島美術館「モネ・連作の情景」に行ってみました。なにしろ日本では大人気の画家ですから、土日祝は「激混み」と聞いていたので、有給をとって平日に行きましたが、かなりの賑わいでした。

印象派を代表する画家のモネですが、「印象派以前」の作品も、たくさん展示されていました。いわゆる「睡蓮」のようなタッチの画風ではなく、「普通の美しい風景画」ではあるのですが、色遣いや繊細さは共通していて、モネの個性がにじみ出ていました。

そのなかでも一際大きな作品《昼食》は、モネの妻と息子を描いた作品で、何気ない日常の風景を切り取ったような穏やかで暖かな作品でした。
モネ自身もこの作品には自信があり、「サロン」と呼ばれる展覧会に出展しました。当時は、「サロン」で認められなければ、画家としては生きていけない状況だったそうですが、あえなく落選。

しかし、この落選があったからこそ、「印象派」とよばれる、若い画家たち〔モネ、ルノワール、ドガ、ピサロら〕のグループが生まれたそうです。

印象派誕生以降（1870年代）、モネの作品は、どんどん形をとらなくなっていく。物の輪郭を描くのではなく、空気の粒や光の粒を描いているような感じです。
タイトルにもなっている『連作』とは、『同じ場所やモチーフを異なる季節や天候、時刻のなかで観察し、刻々と変化する印象や光の動きの瞬間性を複数のキャンバスに連続して描きとめるという表現手法』なのですが、同じモチーフでも、年代が新しくなるほどに、形はさらにあいまいになっていました。
それなのに、まるで絵の中から、かすかに音がきこえてくるような、気温や湿度をかんじるような、体の奥の感情が震えるような、自分も絵の中にとりこまれていくような不思議な感覚がしました。これです、これ！！物足りなかったのは、この感覚です！

展覧会の最後は、《睡蓮》をはじめとする『ジヴェルニーの庭』を描いた作品群でまとめられていました。晩年のモネは視覚障害に悩みながらも、1926年86歳で亡くなるまで制作を続けたそうです。画家にとって視覚障害は致命的にも思えますが、だからこそ、モネの独特な画風が生まれたといえるのかもしれない。
逆境の中でも新たな挑戦を続け、自分の世界を確立したモネ。その強い精神が、曖昧模糊とした絵の中から響き渡る、すばらしい展覧会でした。

桜は散ってしまいましたが、いろとりどりのお花が力強く咲き誇っています。花壇だけでなく、街路樹の隙間や、コンクリートの割れ目から芽生えた草花が、命の輝きを教えてくれます。花粉とか黄砂とか色々ありますが、春はうれしい季節ですね。
皆さま、どうぞお身体をたいせつに、健やかにお過ごしくださいませ。

ロンドンのウォーター・ルー橋を
描いた「連作」



1900年（曇り）



1904年（日没）



1904年（日の出）



睡蓮



睡蓮

今回の展覧会の中で
一番好きな絵です。

今月も最後まで読んで頂きまして、
ありがとうございました。
来月もよろしくお願ひいたします。